

# 居串佳一の画業 - 「北の絵」を描く

北海道立近代美術館学芸員

**野田 佳奈子** (のだ かなこ)

2014年、北海道教育委員会に採用。同年より北海道立帯広美術館学芸員として勤務。2020年より現職。



## 1 はじめに

北海道の美術界は、明治時代末に來道した指導者らの影響によって制作の活動が広まり、大正時代に入ると各地から美術家が輩出されるようになりました。それはやがて大きなうねりとなり、1925年には全道規模の美術団体・北海道美術協会（道展）の結成へとつながっていきます。このように道内美術界が一つの盛り上がりを見せる頃、中央画壇を舞台に活動を展開する画家たちも、次第に増えていきました。彼らは同時代の美術的潮流を間近に見ながら、自身の作風や描くべき画題を模索していきました。

そうした時代にあって、北海道の風土をテーマに絵を描いた美術家の一人が、居串佳一（1911-1955、以下佳一と表記<sup>\*1</sup>）です。佳一は網走ゆかりの洋画家で、戦前は道展や東京の美術団体・独立美術協会（独立展）を、戦後は独立展とともに全道美術協会（全道展）を舞台に活動を続けました。作品の多くは故郷にまつわる題材が選ばれており、それは網走にいた頃だけでなく、東京で活動していた時期においても一層の叙情性をたたえて表現されています。

今回は、佳一の生涯をたどるとともに、その作品について紹介します。

## 2 画家へのあゆみ

佳一は、愛知県からの屯田兵である父・水野徳三郎と母・イヨのもと、五男七女の次男として、野付牛村相ノ内（現・北見市）に生まれました。1919年に父は屯田兵を除隊、佳一が8歳の頃に一家で網走へと移ります。網走尋常高等小学校（現・網走小学校）に転校した佳一は、ここで代用教員の宮本金次と出会いました。宮本は、札幌第一中学校（現・札幌南高校）在学中に、数々の美術家を育んだ図画教諭・林竹治郎に絵を学んだ人物の一人でした。網走に赴任した宮本は、全学年の図画の授業を受け持つとともに、放課後になると子どもたちと写生に出かけていました。そうした中で、佳一は宮本に絵の手ほどきを受け、美術への関心を高めていきました。宮本によれば、子どもの頃の佳一の絵は「色彩を多くするより、よく描き込む、根気のよい絵であり、この面では確かに異色で力もずば抜けていた」<sup>\*2</sup>のものであったと言います。

その後、佳一は網走中学校（現・網走南ヶ丘高校）に進学し、美術部「白洋画会」に参加します。白洋画会では、太平洋画会研究所に学んだ教員・角田星湖<sup>せいこ</sup>が指導しており、春と秋に展覧会を開くなど、当時として活発な活動が行われていました。

\*1 1940年に居串栄治の養女宣子と結婚し、養子縁組をすることで水野姓から居串姓となる。本稿では表記を統一するため「佳一」と記載する。

\*2 宮本金次「居串佳一の少年時代」（『北海道と近代洋画シリーズ5 居串佳一展』、北海道立美術館、1973年）、p. 25。

佳一がいよいよ画家への一步を踏み出すのは、1930年のことです。当時中学五年生だった佳一は、自身の支援者である居串栄治とともに旭川の洋画家・高橋北修のもとを訪ね、絵を見せたところ、道展への出品を勧められました。そして第六回道展では、水彩画の《コスモス》(図1)が初入選を果たしました。この作品は、花瓶に生けられた花を写実的にとらえたもので、素朴な描写の中にも確かなデッサン力がうかがえます。佳一は、のちに当時を振り返って次のように語っています。

確か私が初めて出品者の末座に加わった第六回展の時、上札して観たあの感激は今にして忘れられない。網走のE氏夫妻とともに会場をさまよいながら田辺三重松氏や能勢眞美氏、繁野三郎氏、本間紹夫氏、高橋北修氏等の風景、中村善策氏、故山本菊造氏等の人物や、あの時の協会賞小山昇氏のブラック・エンド・ホワイトの近代的風景画に、只々驚かされたものである。<sup>\*3</sup>

この言葉からは、当時の北海道画壇を牽引していた画家達から、新鮮な感動と刺激を受けたことが伝わってきます。実際、その後描かれた作品には、モチーフの細部を省略したり、荒い筆触による表現が見られるようになるなど、道展で目にした作品の影響が強く表れています。

1931年に中学校を卒業した後、佳一は網走の測候所に一時勤めますが、両親の理解を得て制作に専念していききました。



図1 《コスモス》1930年、網走市立美術館蔵

### 3 「ローカルカラー」の意識

画家として歩み始めた佳一は、引き続き道展への出品も重ね、23歳で会員となったほか、1932年には第2回独立展へも入選を果たしました。独立美術協会(独立展)は、1930年に設立された東京の美術団体で、既成画壇からの独立を謳い、日本の美術界に新風をもたらしたグループの一つです。ここには札幌出身の画家・三岸好太郎が創立会員として参加していたほか、小山昇や菊地精二など、道内ゆかりの画家たちも出品していました。佳一は道展と並行して、気鋭の画家たちによるこの団体にも参加していくこととなります。

このように、北海道のみならず中央でも作品が認められ始めたこの頃、佳一は自身の制作について次のような言葉を残しています。

常に僕は風景画を物する場合のせめて画面の一部分にだけでもいい、ローカルカラーを意識して表現することの力を呈す。

即ち1枚の風景を製作するにも無量以外に郷土の空気か土の持つ香を現したいのだ。<sup>\*4</sup>

こう語る1933年頃から、作品には北国の景色が一層力強く描かれるようになりました。この時期に制作された《夏山》(図2)では、緑豊かな山を構築的に描くとともに、太い輪郭線を用いて、今にも山がせり出してきたような迫力ある画面を生み出しています。こういった描き方からは、当時画壇を席卷していたフォーヴィスムやキュビズムといった様式や、独立展の画家・清水登之への傾倒がうかがえます。その後は、大らか



図2 《夏山》1933年、網走市立美術館蔵

\*3 水野佳一「感想」(『第十回北海道美術協会展覧会出品目録』、北海道美術協会、1934年)、pp. 46-47。

\*4 水野佳一「北見」(『独立クロニック』、1933年)、pp. 6-7。

な写実的描写の中に幾何学的要素を取り入れつつ、冷たい色彩によって網走の風景を描いた作品を手がけています。

そして1935年、佳一はさらなる進展のために上京し、画材を扱う中央商会で働きながら絵を描きました。佳一は東京にいてもなお、郷土に思いを馳せ続けました。あるいは、故郷から離れたからこそ、その思いが強まったのかもしれません。そうした中で生み出されたのが《静夜》(図3)です。この作品は、幅の細いキャンバスに、夜の雪山にひそむ5匹の狐と1羽の鳥を描いたものです。銀色の半月が輝く静かな夜に、闇に溶け込む狐や鮮やかな羽を持つ鳥、雪の積もった地面が照らし出され、幻想的な詩情をたたえています。この頃使用していた画帳には、動物園で写生したと思われるスケッチが多数残されています。佳一はそれらを画面上で組み合わせつつ、動物たちの棲む厳しい自然の世界を想像し、描き出すことで、北国の風土を表現しようと試みています。

#### 4 人間へのまなざし

その後、佳一は故郷に由来する画題から一度離れ、中国の難民を題材とした群像表現を手がけるようになります。この変化の理由として考えられるのは、1936年以降、仕事の出張やスケッチ旅行、また従軍画家と

して幾度か中国を訪れていたことです。このほか、清水登之が同様の画題を手掛けていたことも影響をもたらしたと推測されます。この時期に描かれた作品が《曠原》(図4)です。画面には、家畜を連れて広漠とした野原をさすらう人達が描かれています。皆、表情は暗く、その眼差しは彼方へ向けられている様子。遠くでは煙が高く上がり、空に広がっています。戦火から逃れる人々を描いた本作からは、深い悲しみと不安が伝わってくるようです。難民という画題を通じ、佳一は荒野で懸命に生きる人間の姿を描き出しています。

こうした作品の制作に取り組む一方、1940年以降はアイヌに題材を求めた作品も手掛けています。その一つが《弓》(図5)です。佳一は1940年に帰郷した際、白老や阿寒湖畔に取材しており、本作では広い大地を背景に、弓を構える男性やそばでたたずむ少年の姿を描いています。独立展に発表後、この絵は1941年にイタリア政府の買い上げ作品に選ばれました。これは、当時同盟関係にあったイタリアが、文化的提携のために毎年1点の優秀作品を買い取りたいと希望したもので、かねてより佳一の作品に着目していた画家・有島生馬によって推薦されました。

このように、佳一は1930年代末以降、人間を主要なモチーフとした作品を制作するようになりました。そこには、雄大な自然の中で生きる人々が叙情的に描き出されています。



図3 《静夜》1937年、網走市立美術館蔵 (左)  
図4 《曠原》1940年、網走市立美術館蔵 (中央)  
図5 《弓》1941年、所在不明 (右)

## 5 暮らしの中から

終戦後、東京での苦しい生活を前に、佳一は故郷へ帰ることを決意しました。網走に戻ってからは、風景や暮らしの様子、家族の姿など、身近なものを題材にした穏やかなタッチの作品を手掛けています。例えば《春漁》(図6)では前景に母子を描いていますが、モデルは自身の妻と長男であると言われています。その向かいに座る女性の手には魚と網が握られており、後ろの浜辺では、漁に従事する人々が見えます。遠景に見えるのは、雪の残る知床連山。春のニシン漁の場面を描いた本作からは、家族や生活を見つめる温かいまなざしが伝わってきます。

佳一が網走に移住し、転機を迎えた頃、北海道の美術界も新たな動きを見せていました。それが全道美術協会(全道展)の結成です。これは、道内在住の美術家と疎開中の美術家によって立ち上げられた団体で、佳一は創立会員として名を連ねています。以降、佳一は独立展とともに全道展にも参加していきました。

このほか、講習会の講師として地元で絵を教えたほか、絵画グループ「潮画会」を結成するなどの活動も行っています。また1948年には地元有志の協力によって、郊外にアトリエを得ることが出来ました。こうして1940年代後半から1950年にかけては、地域とのつながりを持ちながら、佳一は制作に励んでいきました。



図6 《春漁》1947年、網走市立美術館蔵

## 6 ユカラの世界

1951年、佳一は再び故郷を離れ、家族と共に上京しました。東京に移ってからは、引き続き身近な人々を描いたほか、新たに裸婦像へも挑戦しています。浜辺や草原で寛ぐ裸の女性を描いたこの頃の作品は、茶褐色を基調とした色合いとも相まって、エキゾチックな趣を感じさせます。

その後、佳一はアイヌの叙事詩・ユカラに着想を得たシリーズを手がけました。制作の動機について、佳一は次のように述べています。

昔、金田一博士の岩波文庫版、ユーカラーを読んで感動したことがあり、一度物語詩をタブローにしてみたく思っていました。

実際にコンポジションを考えて見て、これは難しいと思ったのですが、絵画の世界に限定された構成という面白さで描く楽しみは味わえたのですが、詩の持つ本質と絵の特質との間にあるもどかしさを自覚させられました。しかし私はこれからも何とかして私の世界の中に持ち味として強力な性格を生かして行ってみたいと、過去、現在、未来、にまたがり理想を持っています。<sup>\*5</sup>

佳一は叙事詩にインスピレーションを受けながらも、物語の具体的な内容を再現するのではなく、自由な発想で自身の作品世界を展開しました。例えば《ユーカラー(チパシリ)》(図7)では、鳥たちが舞う中、



図7 《ユーカラー(チパシリ)》1954年、網走市立美術館蔵

\*5 『全道美術協会10周年記念画集』、全道美術協会、1955年、p. 4。

\*6 居串佳一「北の絵」(『第9回全道展目録』、1954年)、p. 2。

一人の女性が岩場から水辺へと足を一步踏み出す姿を描いています。ユカラの登場人物が裸であることはないため、この描写はそれ以前に着手していた裸婦像の造形的関心を引き継いだものと考えられます。温かい色調と滑らかな筆遣いで描かれた本作は、目に見える北海道の光景からは離れ、甘美な詩情をたたえています。

## 7 「北の絵」を求めて

様々な手法で北海道の風土を描き出そうと試みていた佳一ですが、その生涯は1955年、44歳で幕を閉じることとなります。この年、佳一は第22回独立展の札幌移動展のために奔走し、その後はフランス遊学の資金を工面するため、釧路で個展を開催しました。そしてその後、札幌滞在中に風邪の悪化から脳膜炎を併発し、息を引き取りました。

死の前年、佳一は「北の絵」と題して次のような文章を残しています。

セガンチニーのアルプス構想とまでゆかなくとも、望むところは、ほのぼのとした北海道のものであり、どうしても私達でなくては描けない一線がある筈であった。これがもどかしくも何とかならないのかと日頃苦行する原因である。

今まで多く北海道的なものを選んで描くことが多かった私にはこの問題が片がつかないのである。(中略)北海道が描きたい近頃、北海道を離れて北海道を観ると、かつての気のつかなかったような北海道のものが思い浮かんで好きになってしまうのである。<sup>\*6</sup>

佳一の求めた作品世界とは、実際の北国の風物そのものを描くことよりも、豊かな自然とそこで生きる人々を象徴的に表現することにあります。佳一の画業は、風景、動物、人物と題材を変えながら、時に実感を込めて、また時にロマンティズムをたたえて、飽くなき探究心で「北の絵」を求める道のりであったと言えるでしょう。

付記

本文中の引用箇所については、読みやすさを考慮し、原則として常用漢字を使い、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた。また、適宜句読点を補った。

掲載図版についてはいずれも居串佳一作。

## 主要参考文献

### 【書籍】

- 『独立クロニック』、北海道独立美術作家協会、1933年  
『第十回北海道美術協会展覧会出品目録』、北海道美術協会、1934年  
『第9回全道展目録』、全道美術協会、1954年  
本田明二『全道美術協会10周年記念画集』、全道美術協会、1955年  
今田敬一『北海道美術史 地域文化の積みあげ』、北海道立美術館、1970年  
『北海道と近代洋画シリーズ 5 居串佳一展』、北海道立美術館、1973年  
吉田豪介『北海道美術をめぐる25年』、輔仁書院、1983年  
『オホーツク・魂の還流—居串佳一展』、北海道立近代美術館ほか、1995年  
吉田豪介『北海道の美術史 異端と正統のダイナミズム』、共同文化社、1995年  
地家光二『居串佳一 オホーツクへ還る』、北海道新聞社、2000年  
吉田豪介『道展・全道展・新道展 創造への軌跡』、北海道新聞社、2005年  
『居串佳一展 オホーツクにこんな画家がいた』、網走市立美術館、2011年

### 【論文】

- 鈴木正實「北海道の画家と「北方」の現れ方」(『紀要1998-99』、北海道立近代美術館ほか、1999年)  
今村信隆「北海道の油彩画史における動物モチーフの問題：油彩画の移入期から1940年代前半までを中心に」(『北方人文研究』第六号、北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター、2013年)